

和本の名称 一粘葉装・列帖装・綴葉装・大和綴一

装訂工程からの考察

山中康行

和本の装訂名称に使用される用語は、粘葉装、綴葉装、列帖装、大和綴、結び綴、四ツ目綴等がある。しかし、同じ装訂の和本が異なる装訂名称で呼ばれたり、異なる装訂の和本が同じ装訂名称で呼ばれる「同名異装、異名同装」の論争は、昭和初期から現在まで混乱が続いている。

和本の名称研究はこれまで、① 歴史文献にその根拠を求める方法と、② 形態から名称を解明する方法と二つの方法でなされてきた。しかしそのいずれもが装訂名称の説明には不十分、不適切であったために、和本の装訂名称の混乱を一層増す結果となっている。本稿では、解決策の一つとして、製作工程の視点から装訂名称について考察する。

1. はじめに

代表的な和本の外形を図示したのが、図1である。各装訂の特徴は次のとおりである。

装訂1：料紙を半折して重ね合わせ、各紙の折り目を「糊」付けして表紙をつけたもの。

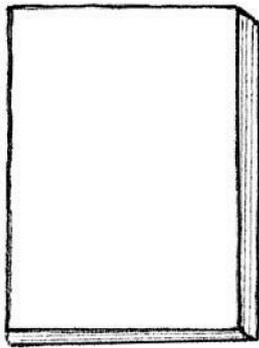
装訂2：若干の料紙を重ね合わせて半折一括りとし、数括りを重ねて、これに表紙を添え、「糸」でかがったもの。

装訂3：料紙を重ねて、紙縫等で下綴じを行ったうえに、前後に表紙を添えて、右端を二箇所、「紐、束ねた糸」で結び綴じにしたもの。

装訂4：料紙を二つ折りにして、折り目と反対側の端に穴を四つあけ「糸」で綴じたもの。

図1 和本の外形

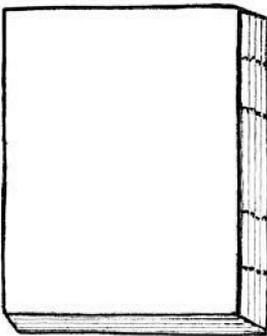
京都女子大学蔵



装訂 1 (糊綴)



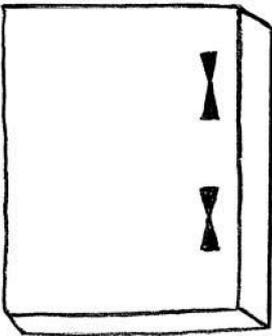
△妙抄口傳 (中巻) 1308年写 (請求記号:KN186.1/My/1)



装訂 2 (糸綴)



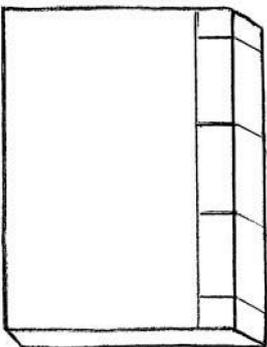
△伊勢物語 1591年写 (請求記号:913.32)



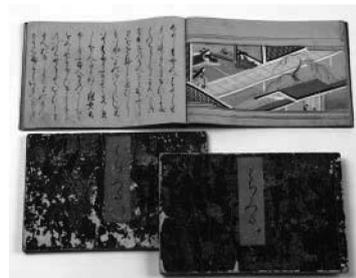
装訂 3 (紐綴)



△きやうと：名所と美術の案内 (上・下巻) 1895年
(請求記号:291.62/Ma91/1~2)



装訂 4 (糸綴)



△はちかつき 江戸前期写 (請求記号:913.49/H11/1~3)
奈良絵本

図3 装訂工程（手順）

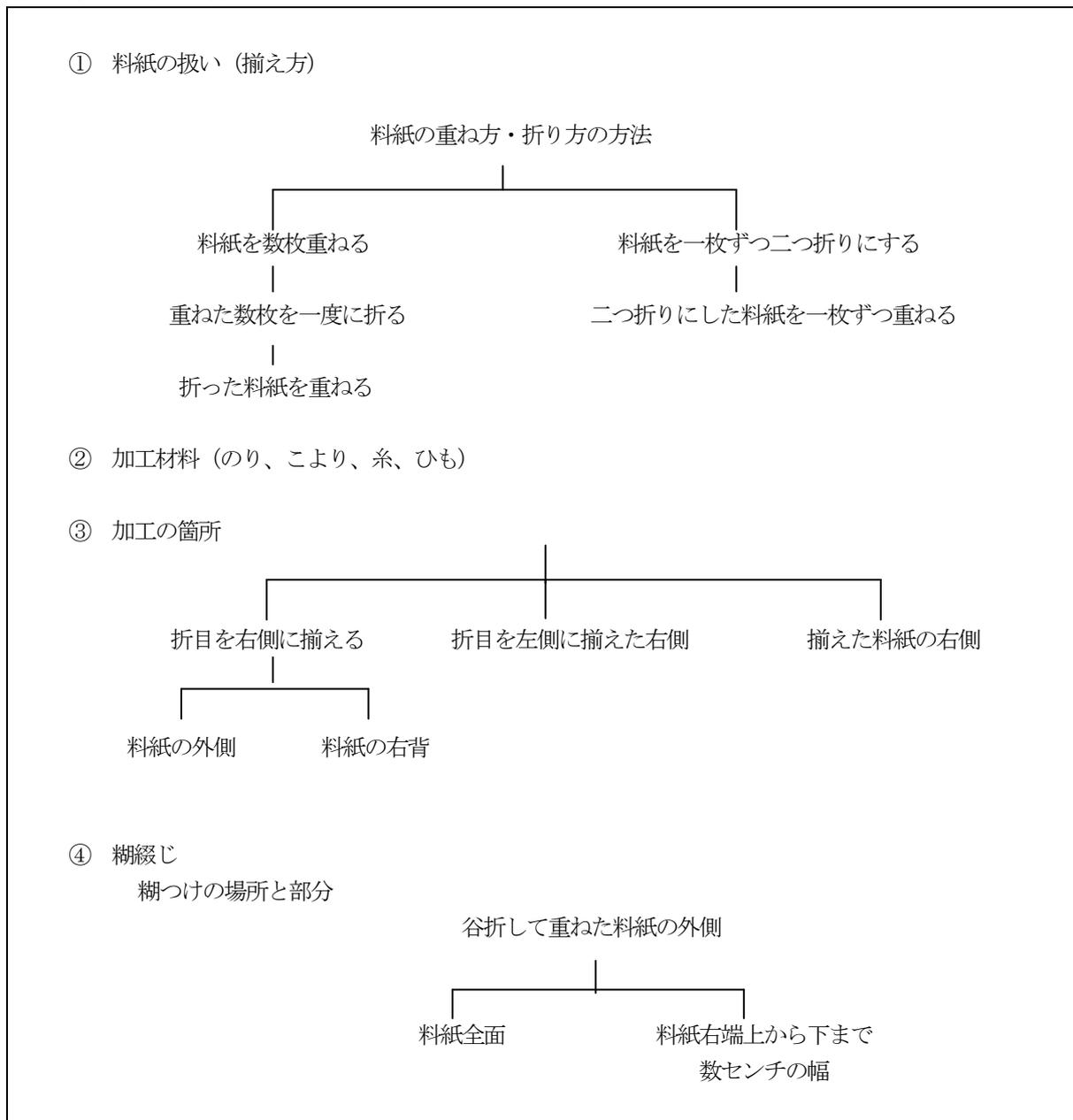


図3（装訂工程）は、加工材料、加工位置と糊付け部分を区別を示したものである。図1の装訂1に示したものは、糊だけを使用する。貼り付け（糊付け）部分に二様式がある。装訂2は糸を使用する。装訂3は紐を使用する。装訂4は糸を使用する。

図4 使用材料による装訂名称

使用材料	使用材料による綴の名称	装訂名称	綴の形態(外形)
糊	糊綴	粘葉装	装訂1
紙縫り	紙縫綴	本綴 仮綴 下綴	
糸	糸綴	線装本 四ツ目綴 列帖装 綴葉装	装訂4 装訂4 装訂2 装訂2
紐 (糸を束にして 使用することも ある。)	紐綴	大和綴 結び綴 (大福帳綴) (判取帖) (掛取り帳綴)	装訂3 装訂3

図4(使用材料による装訂名称)では、和本の装訂に使用する材料は、糊、紙縫り、糸、紐がある。紙縫りは、仮綴じ、下綴じ、本綴じに用いられる。糸を使用する場合には、シナの用語「線装本」(川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』雄松堂出版、1982年)という名称が使用されることがある。糸綴じ本ともいわれる、四ツ目綴、五ツ目綴、麻の葉綴、亀甲綴、康熙綴等がある。同じく糸を使用するが、図1の装訂2の和本では、料紙の処理、綴じ方の異なり、列帖装、綴葉装の名称がある。

次に、図1の装訂1~4に示した外装の和本の製作工程を説明する。おおむね以下の手順でつくられる。料紙の加工方法(折り方、重ね方、糸の綴じ方)と加工材料(糊、糸、紐)、加工位置は次のようになる。各装訂とも表紙の説明は省略している。特に装訂2の表紙の付け方には特徴のある和本が多く見られる。

装訂1：料紙を一枚ずつ、料紙の長いほうの辺の中央から二つ折りにして、その折目を右側に揃え、各料紙の外側どうし(山折の部分)を折目にそって数センチ(五、六ミリから約1センチ)の幅で上から下まで糊付けをして次々に貼りあわせて冊子にする装訂方法。外側全面に糊づけするものもある。(糊付け部分には ① 数センチの幅 ② 3~4ミリの幅 ③ 背 ④ 折目に近い部分 ⑤ 折目の外側 ⑥ 非書写面を全面の別がある。)

装訂2：料紙を複数枚重ねてから料紙の長いほうの辺の中央から二つ折りにして、それをいくつか重ねた後で、折目を右側に揃え、折目の背のところ(山折部分)に刃物で切れ目(穴)を四箇所あけ、糸で綴じる装訂方法。なかに多くの糸が残っているのが特徴である。

装訂3：料紙を重ね、(重ね方は、折らずに一枚ずつ重ねてもよいし、一枚ずつ料紙の中央から折った料紙を重ねてもよい。このとき折目が左右どちらにきてもよい。)表紙の右側の端・上・下から数センチのところに穴(二つ、四つ、八つの場合がある)をあけて、数本の糸または紐等で綴じる装訂方法。外側に結び目が出ており、なかには房の如くになっている、装飾的なものがある。

装訂4：料紙を一枚ずつ、長い方の辺の真ん中で二つ折りしたものを、折り目を左に揃えて重ね合わせたものの右側を糸でとじる装訂方法を袋綴じといい、綴じ穴が4つのものを四ツ目綴じという。和本の多くはこの装訂で作られている。

3. 和本装訂名称の変遷

和本の装訂名称については、最初に述べた如く同名異種、異名同種の問題があるので、図1の装訂1から装訂3がどのような名称で呼ばれていたかを説明する方法として、最初に和装本の外形（現姿）の図と実物の写真を図1で示した。ここでは、おもに20世紀に公表された単行本及び雑誌論文から21件を抽出し、各研究者等の「粘葉装、綴葉装、列帖装、大和綴、結び綴」の説明の部分をまとめる。各人の説明に対応する装訂形態の図を時系列的に並べ、図1で示した装訂と対比させた一覧表が表1である。

表1 装訂名称の「同名異装、異名同装一覧」

	装訂1	装訂2	装訂3
1918 和田維四郎『訪書余録』 (著者私刊本 新装複製版 臨川書店)	粘葉綴 (列丁)	胡蝶綴 (大和綴)	
1920 吉澤義則『和漢書の装潢に就いて』 (図書館雑誌42 pp.1-14)	列帖 (粘葉) ┌───┴───┐ 第1種 第2種 (糊とじ) (糸とじ) 大和綴		
1932 田中敬 『粘葉考—胡蝶装と大和綴—』 (早川書店)	(古式) ┌───┴───┐ 粘葉 (粘綴) 大和綴 (綫綴) ┌───┴───┐ 粘葉 胡蝶装		打抜綴、 新大和 房綴 近代的大和
1939 日本書誌學會「制定術語」 (書誌学大12巻1号)	胡蝶装 ┌───┴───┐ 粘葉 綴葉		大和綴
1941 上田徳三郎『製本乃輯』 (アオイ書房)		胡蝶綴	大和綴
1972 川瀬一馬『日本書誌學概説 増補版』 (凸版印刷)	粘葉	綴葉	大和
1974 橋本不美男『原典をめざして —古典文学のための書誌—』 (笠間書店)	粘葉装	列帖装 (綴葉装)	大和綴

1976 長澤規矩也『古書のはなし —書誌学入門』 (富山書房)	<p style="text-align: center;">胡蝶装</p> <pre> graph TD A[胡蝶装] --- B[粘葉装] A --- C[綴葉装] </pre>		大和とじ
1977 山岸徳平『書誌学序説』 (岩波書店)	粘葉装 (胡蝶装)	<p style="text-align: center;">大和綴</p> <pre> graph TD A[大和綴] --- B[綴帖装] A --- C[大和綴] B --- D[列帖装] B --- E[大福蝶装] C --- F[結び綴じ] </pre>	
1979 池上幸次郎・倉田文夫『本の作り方』 (主婦と生活社)	粘葉装	列帖装	大和綴
1987 遠藤諦之輔『古文書補修六十年』 (汲古書店)	粘葉装	胡蝶装	大和綴
1991 藤井隆 『日本古典書誌学総説』 (和泉書院)	粘葉装 (胡蝶装)	綴葉装 (綴帖装)	大和綴
1995 中野三敏 『書誌学談義江戸の版本』 (岩波書店)	<p style="text-align: center;">胡蝶装</p> <pre> graph TD A[胡蝶装] --- B[粘葉装] A --- C[大和綴じ] </pre>		結び綴じ
1998 廣庭基介・長友千代治 『日本書誌学を学ぶ人のために』 (世界思想社)	粘葉装	綴葉装 (胡蝶装) (列葉装)	大和綴 (結び綴)
1998 中藤靖之 『古文書の補修と取り扱い』 (雄山閣)	粘葉装	綴葉装	大和綴
2002 藤本孝一『古写本の姿』 (日本の美術9 凸版印刷)	粘葉装	綴葉装	大和綴
2003 杉浦克己 『改訂版 書誌学』 (財団放送大学教育振興会)	粘帖装 (胡蝶装)	綴葉装 (列帖装) (襲ね綴じ)	大和綴じ

2004 藤森馨 「古典籍装訂用語の整理に 関する試論」 (図書館雑誌 Vol.98No.2)	粘葉装・胡蝶装 列綴・列帳閉	大和綴・列帖装 綴葉装	結綴・大和綴
2006 榎筥節夫 『書庫涉獵—書写と装幀—』 (東京おうふう)	粘葉装 胡蝶装	大和綴	結び綴
2006 吉野敏武 『古典籍の装幀と造本』 (印刷学会出版部)	粘葉装	大和綴	
2010 堀川貴司『書誌学入門』 (勉誠社)	粘葉装	列帖装	大和綴

表1より、同名異装、異名同装の状況を要約して示す。

図1・装訂1の名称として、列丁、粘葉綴、粘葉、胡蝶装、粘葉装、蝴蝶装、列綴、列帳閉など。

図1・装訂2の名称として、胡蝶装、大和綴、綴葉、胡蝶綴、列帖装、綴葉装、綴帖装、大福帳装、綴帖装、大和綴じなど。

図1・装訂1と装訂2の総称として、列帖、粘葉、胡蝶装。

図1・装訂3の名称として、打抜綴、新大和、房綴、近代的大和、大和綴、大和、結び綴じ、結綴など

図1・装蹄2と装綴3の総称として、大和綴

このように、同じ装訂にもかかわらず、多くの複数の名称がついており、同じ名称が別の装訂を示すことがあるように、粘葉装、列帖装、綴葉装、大和綴等の用語が、各人各様に使用されてきた。

この混乱の一原因は、すでに述べたように、① 歴史文献にその根拠を求める方法と、② 和本の形態から名称を解明する方法とがなされてきたことによる。和本と漢籍の装訂名称の区別がない場合や、混同された説明などもあり、その多くが、和本の装訂名称の説明として説得力に欠ける。例えば、図1の装訂3の装訂は、装訂1、装訂2のどちらにも重ねてできる装訂法であるにも関わらず、殆どの著述者が、装訂3の装訂名称のサンプルとして示している。つまり、現姿の外形の判断だけで、特定のひとつの名称しかつけていないことや、装訂名の解説と、個別の和本に施されている装訂名とを区別しないで説明している。このような不十分な説明が混乱を一層増す結果となっている。

藤本孝一は、この問題を指摘し、「たとえば、綴葉装で大和綴になっている。といった複数の装訂方法を含んだ説明ができる。」としている。(『日本の美術9』No.436, p.59, 2002年)。藤本の考えを用いれば、料紙の折り方と綴じ位置を示す袋綴じで製作された形態別の名称、四ツ目綴、麻の葉綴じ、亀甲綴、康熙綴(図5参照)を、それぞれ、袋綴—四ツ目綴、袋綴—麻の葉綴、袋綴—亀甲綴、袋綴—康熙綴と表することができるので、間違いは起こらない。このことを根拠に著者は藤本の提案に賛同するものである。

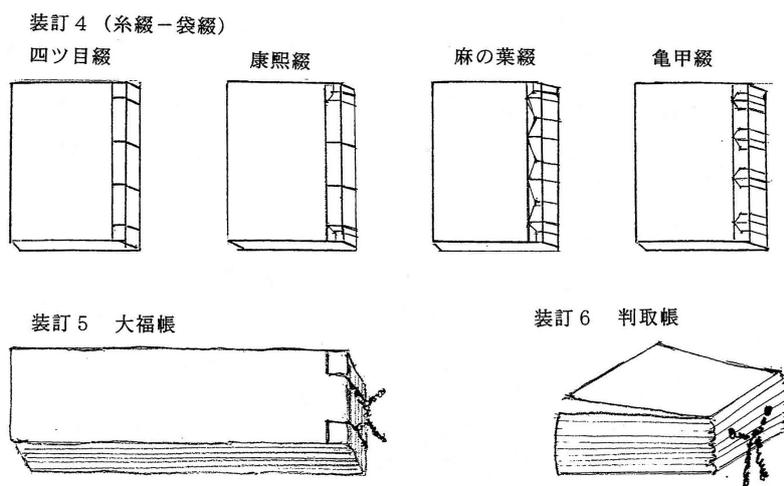
4. 公的機関の見解

表 1 に個人と日本書誌学会の見解に対して、公的機関の見解を以下に挙げる。 装訂 1～3は図 1の装訂 1～3に対応する、表 2～4は表 1に対応している。

1) 国文学研究資料館

国文学研究資料館 第 44 回常設展示「和書のさまざま」(1990 年開催)の解説を一覧表にすると図 5 のようになる。

図 5 参考図



装訂 2 装訂名称を「列帖装」としており、括弧内に別名として「綴葉装」とし、装訂 3 の装訂方法を「大和綴」としている。

表 2

	装訂 1	装訂 2	装訂 3
1990 国文学研究資料館 「和書のさまざま」	粘葉装	列帖装	大和綴

「国文学研究資料館ヴァーチャル展示「和書のさまざま」(2003 年開催)の解説を一覧表にすると、図 6 のようになる。

図 6

装訂 1	粘葉装 (でっちょうそう)	二つ折りにした料紙を重ね合わせ、折目の部分を糊付けしたもの。
装訂 2	列帖装 (れっちょうそう)	数枚の料紙を半分に折って一括りとし、数括りの折目の部分を糸で綴じ合わせたもの綴葉装 (てっちょうそう) とも呼ばれる。
装訂 3	大和綴 (やまととじ)	表紙の上から結び綴じにしたもの。歌書などの装訂に見られる。

1990年の、「大和綴」が2003年の解説(図7)では、「結び綴(大和綴)」と変更になり、図1の装訂3の資料が図示されている。説明には、「表紙の上から結び綴じにしたもの。」とあり、「結び綴じにした装訂」だから「結び綴じ」というようにもとれる。図1の装訂2と似通った料紙の折り、綴じ方をする、大福帳、判取帳(参考図5)の装訂の説明が欠落している。結び綴を「列帖装や袋綴本を綴じする方法の一つです。」として、図1の装訂2や図2の装訂4の装訂がされた和本にさらに重ねて装訂(加工)できることを説明している。新たに加わった説明見解である。「別称を大和綴とも呼ばれます」として、大和綴の名称を別名の位置に下げている。

表3

	装訂1	装訂2	装訂3
2003 国文学研究所 「ヴァーチャル展示」	粘葉装	列帖装	結び綴 (大和綴)

図7

装訂1	粘葉装(でっちょうそう)	料紙を二つに折って重ね、その折目の外側どうしを糊付けして、背を表紙で覆った本。完全に開く見開きと、糊付け部分までしか開かない見開きとが、交互に現われます。
装訂2	列帖装(れつじょうそう/れっちょうそう)	料紙を数枚〜一〇枚ほど重ねてから二つ折りにし、数くくりを重ね、折り目の部分に穴をあけて糸で綴じ、表紙を付けた本。綴葉装ともよばれます。
装訂3	結び綴(むすびとじ)	表紙の右端から一センチぐらいのところに穴を開け、紐や糸を通して結ぶ綴じ方。列帖装や袋綴本を綴じする方法の一つです。大和綴とも呼ばれます。

2) 国立国会図書館

図8

装訂1	粘葉装(でっちょうそう)	料紙を二つに折って重ね、その折り目の外側どうしを糊付けにして、背を表紙で覆った本。
装訂2	列帖装(れつじょうそう/れっちょうそう)	料紙を数枚から十枚ほどを重ねてから二つ折りにして「一くくり」とし、これを数くくり重ねて、折り目の部分に穴を開けて糸で綴じ、表紙を付けた本。綴葉装とも呼ばれる。
装訂3	結び綴(むすびとじ)	表紙の右端から1cm位のところに穴を開け、紐や糸を通して結ぶ綴じ方を結び綴といいます。列帖装や袋綴本を綴じする方法の一つ。大和綴ともよばれます。
	袋綴	二つ折りにした料紙を重ね、折目の反対側を綴じた本を袋綴といいます。

粘葉装の説明で、「背を表紙を覆った本」とあるが、これは厳密に言えば、「粘葉装の包背装」になる。粘葉装の説明としては蛇足である。列帖装の説明で穴の数、綴じ方についての説明が十分でない。背に開ける穴は四つである。結び綴の説明では、「列帖装や袋綴本を綴じする方法の一つ」とあるが、列帖装や袋綴に装訂した本にさらに装訂する方法にとれる。この場合の装訂名称は、列帖装—結び綴、袋綴—結び綴という表記になる。料紙の折りが列帖装や袋綴と同じであることを説明しているものととらえるが、料紙の折り方、重ね方の説明が不足しており誤解を招く記述である。

表 4

	装訂 1	装訂 2	装訂 3
2012 国立国会図書館	粘葉装	列帖装	結び綴 (大和綴)

最後は、国文学研究資料館と国立国会図書館の見解である。20 世紀これまで多くの研究が発表されたが、現段階では、装訂 1 の名称は、「粘葉装」、装訂 2 の名称は「列帖装」、装訂 3 の名称は「結び綴」がふさわしいと考える。国文学研究所、国立国会図書館のどちらの見解も、図 1 の装訂 2 を綴葉装ではなく、列帖装としていることは、注意すべきである。装訂名の「大和綴」の忌避は混乱を避けたものと考えられる。

5.おわりに

粘葉装、列帖装、綴葉装、大和綴、結び綴の名称、装訂名称、読み方、表記法について、同名異装、異名同装の諸説と問題点について、文献 21 件を年代順にとりあげた。さらに、日本を代表する、国立国文学研究所、国立国会図書館の見解 3 件をとりあげ、和本装訂名称が混乱してきた現状と各氏の見解について、管見により分析し、説明を一覧表にして問題点を比較検討しやすくした。不十分な説明 ① 料紙の折り方、② 重ね方、③ 加工材料、④ 加工位置を明確に記述していない) こと、類似の読み方によって複数の装訂名称に該当することになった (例：粘葉装 (デッチョウソウ)、列帖装 (レッチョウソウ)、綴葉装 (テッチョウソウ、テツヨウソウ) ことも、混乱の一原因となっている。

和本の標準的な装訂名称について、外形の図版と装訂方法ともに示すことにより各人の説明に対応する装訂形態の図を時系列的にまとめ、一覧表に整理した。本稿では、製作の流れと使用材料による観点から、装訂名称を考察する必要性を説いたものである。

さらに検討を必要としている項目は、次の 3 点である。

- 1) 装訂名称の根拠として取り上げられた文献の解説および、俎上にあげられた原資料を、新たな視点、①料紙の折り方、重ね方 ②使用材料 ③加工箇所などの新たな視点をもとに読み返し再検討すること。
- 2) 本稿では、和本の装訂名称のうち同名異種、異名同種のものを取りあげた。和装資料の装綴には、名称のないものもある。これらを調査し、ふさわしい名称を付与すること。
- 3) 平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代等の各時代に、和本の装訂がどのように呼ばれていたのかを論究。

以上のように、和本の装訂名称については、同名異装、異名同装が多いため、それぞれの文献の執筆者が使用している装訂名称が、図 1 のどの装訂に該当するのかを確認しておかないと、とんだ間違いをおこすことになる。現段階では、国立国文学研究所及び国立国会図書館の見解を使用するのがもっともふさわしいと考える。

参考文献（刊行年順）

1. 和田維四郎『訪書余録』著者私刊本 1918, (新装複製版 臨川書店 1978)
2. 吉澤義則『和漢書の装潢について』図書館雑誌 42,1920,7,p.1-14.
3. 田中敬『粘葉考 上下』1932,覆刻版,早川書店.
4. 『書誌学』第老巻第貳号「昭和七年新刊書誌學関係書籍批判座談會速記録（昭和 8(1933)年 1 月 28 日）」
5. 『書誌学』「昭和七年新館書誌學関係書籍批判座談會速記録」第老巻第参号 1933.
6. 『書誌学』「本会制定術語原案」第参巻第五号 1934.
7. 「日本書誌学会制定術語」『書誌学会』第 12 卷 2 号 1939,2.
8. 上田徳三郎口述 武井武雄図解『製本』大日本印刷（上田徳三郎『製本乃輯』（『書窓』第 11 卷第 2 号,1941.3. アオイ書房刊）の覆刻） 2000.
9. 広辞苑 第一版 新村出 岩波書店,1955.
10. 長澤規矩也『書誌学序説』吉川弘文館,1960.
11. 伊地知鐵男『日本古文書学提要』新生社,1966.
12. 『書誌学』復刊 新七号 1967,1.
13. 植村長三郎『図書館学・書誌学辞典』東京有鱗堂 1967.
14. 新村出『広辞苑 第二版』岩波書店,1969.
15. 川瀬一馬『日本書誌学概説-増訂版-』東京,凸版印刷,1972.
16. 長澤規矩也『図解図書館学 図書館学参考図録 入門編 1』汲古書院 1974.
17. 藤原覚一『図説 日本の結び』築地書館,1974.
18. 橋本不美男『原典をめざして 古典文学のための書誌』笠間書店,1974.
19. 長澤規矩也『古書のはなし—書誌学入門—』富山房,1976.
20. 『国宝事典』新增補改訂版 文化庁編 便利堂,1976.
21. 長澤規矩也『図解 書誌学入門 図書館学参考図録入門編 4』長澤規矩也,1976.
22. 山岸徳平『書誌学序説』東京,岩波書店,1977.
23. 池上幸二郎・倉田文夫『本の作り方』東京,主婦と生活社,1979.
24. 春名好重編著『古筆大辞典』淡交社,1979.
25. 池上幸二郎・倉田文夫著『本のつくり方』主婦と生活社,1979.
26. 川瀬一馬著『日本書誌学用語辞典』雄松堂出版,1982.
27. 新村出『広辞苑 第三版』岩波書店,1983.
28. 津金幹彦「古典籍目録（国書）の要件」『大学図書館研究』30,1987,p.76-81.
29. 遠藤諦之輔『古文書補修六十年』東京,汲古書店,1987.
30. 仲井徳「図書装訂史について—粘葉装と綴葉装を中心に—」『私立大学図書館協会会報』90,1987,p.78-65.
31. 関靖「金沢文庫書誌論考」金沢文庫研究紀要第二号,臨川書店,1989.
32. 私学図書館協会会報 90,1990.
33. 「国文学研究資料館 第 44 回常設展示」解説 1,1990.
34. 森縣「書籍装幀の歴史における折本の位置」汲古 第 16 号 p.410.1990.
35. 藤井隆『日本古典書誌学総説』大阪,和泉書院,1991.
36. 新村出『広辞苑 第四版』岩波書店,1991.
37. 大内田貞郎「東洋における書物装訂について」『ビブリア』1993.No.105,p.136-147.
38. 中野三敏『書誌学談義-江戸の版本-』東京,岩波書店,1995.
39. 「国文学研究資料館第 61 回常設展示」解説,1995.
40. 出久根達郎「装幀・装釘・アラ？装訂」本の話,pp.44-47.1995.

41. 藤森馨「和図書装訂研究史の諸問題—大和綴を中心に—」國學院雑誌,1995.平成七年一月 p.106-123.
42. 長澤規矩也『古書のはなし-書誌学入門-』東京,富山房,1996.
43. 櫛笥節男「綴葉装及び粘葉装本の装訂の前後関係について」吸古,古典研究会編, 1996,11.
44. 櫛笥節男『大和綴について—歴史史料からの検証—』書陵紀要,第 48 号.1996.p.80
45. 広庭基介、長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』京都,世界思想社,1998.
46. 新村出『広辞苑 第五版』岩波書店,1998.
47. 中藤靖之『古文書の補修と取り扱い』東京,雄山閣,1998.
48. 吉岡眞之「折本のヴァリエーション—田中本『春秋』の旧装訂—」日本歴史,第 600 号,p.47-51.1998.
49. 森縣「書物の構造について」『汲古』第 32 卷,1998.p.10-17.
50. 八嶋正治「列帖装」の実体と名称『汲古』第 34 号,1999.p.17-27.
51. 櫛笥節男「列帖装について」『汲古』第 34 号,1999.p.14-16.
52. 三浦勝己「「大和綴」雑感」『図書館雑誌』93(1),1999.p.50-52.
53. 『日本古典籍 書誌学辞典』p.406 p.559 p.582.岩波書店,1999.
54. 三澤克己「装訂用語としての「大和綴」」『漢籍：整理と研究』漢籍研究会,No.9.2000. p.1-14.
55. 藤本孝一『日本の美術 9』No.436.2002.p.57.
56. 『図書館情報学用語辞典 2 版』丸善,2002.p.154.p.155.p.232.
57. 国文学研究資料館 展示解説,2003.
58. 『図書館用語集 三訂版』日本図書館協会,2003.p.93.p.179.p.311.p.338.
59. 八嶋正治 宮内庁書陵部高齢展示会「書写と装訂—写す 裁つ 綴じる」汲古第 44 号,2003.p.23-29.
60. 谷沢永一『日本近代書誌学細見』和泉書院,2003.
61. 杉浦克己『改訂版書誌学』東京,財団放送大学教育振興会,2003.
62. 藤森馨『古典籍装訂用語の整理に関する試論』図書館雑誌 Vol.98 No.2.2004.
63. 『最新図書館学用語大辞典』柏書房,2004.
64. 「国文学研究資料館 ヴァーチャル展示」解説,2005.
65. 橋口侯之介『和本入門』平凡社,2005.
66. 大貫伸樹『製本探索』印刷学会出版部,2005.
67. 吉野敏武『古典籍の装幀と造本』印刷学会出版部,2006.
68. 櫛笥節男『書庫涉猟』東京,おうふう,2006.
69. 日本古書通信 日本古書数新社 藤本孝一「冊子本の成立」
第 935 号,2007 年 6 月号,p.16-17. 第 936 号,2007 年 7 月号,p.7-9. 第 937 号,2007 年 8 月号,p.12-13. 第 938 号,2007
年 9 月号,p.14-15. 第 939 号,2007 年 10 月号,p.12-13. 第 940 号,2007 年 11 月号,p.24-25. 第 941 号,2007 年 12 月
号,p.14-15.
70. 新村出『広辞苑 第六版』岩波書店,2008.
71. 中野三敏「和本教室」岩波書店『図書』
2008.6.p.44-47.7.p.54-57.8.p.48-51.9.p.60-63.10.p.60-63.11.p.60-63.12.p.38-41.2009.1.p.35-39.2.p.38-45.3.p.38-40.4,
p.43-45.5.p.45-47.6.p.45-47.7.p.36-38.8.p.39-41.9.p.39-41.10.p.42-45.11.p.30-34.12.p.32-34.2010.1.p.34-37.2.p.43-45.3,
p.35-37.4.p.43-45.5.p.41-43.6.p.48-50.7.p.48-50.8.p.51-53.9.p.40-42.10.p.40-42.11.p.32-34.
72. 堀川貴司『書誌学入門—古典を見る・知る・読む—』勉誠社,2010.